シンフォニー大活劇

雪弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンフォニー大活劇

【Ｎコード】

Ｎ４２１６Ｄ

【作者名】

雪弥

【あらすじ】

大陸の遥か南に位置する大都市ベルパレス。物語はここより始まる……

プロローグは殺人から（前書き）

スペック。【王、仮面を付けた２１歳、素顔は不明】【隊長、２５歳。思い込みの激しいアツい奴】【兵士、突っ込みに生きがいを感じる隊長の右腕】

プロローグは殺人から

パッパッパッパ～

軽快なリズムでラッパが鳴り響く。街には紙吹雪がばらまかれ、お祭りムード。

それもその筈、この国々を闇に突き落とし、苦しめ続けた魔王がとうとう倒されたのである。

そしてその勇者が今宵、王である余の元へと帰還する予定。

あぁ待ち遠しい……待ち遠しいぞっ。余は嬉しさのあまり、自慢の杖を振り回した。

「王様、そげん振り回すと危ないけん……」

「ガッ」

「あ……」

どうやら喜びの舞により、余の自慢のオークの杖（４８，０００リラ）が兵士のミゾオチに会心の一撃。

「……ご、ごめんね？」

「王様……万歳……ベルパレスに幸……あれ」

「え……？あの」

困惑する余にゴフッと血を吹きながら、グッと親指を立て垂直に倒れる兵士。

「いや、あの、グッじゃなくてさ……ゴメ」

【返事がない。ただの屍のようだ】

「！！！！！！！！！！」

ＮＯ～～！！！！！

余は頭を抱えた、どうしようどうしよう。こんなオープニング無理があるって！！ちょっ、兵士、起きてよ、微笑みながら逝ってんじゃね～よっ！！

パラッパパパ～

「あ～も、うっせーよ糞ラッパがっっ！！！！！」

【王様はレベルが上がった】

そっちかよ！！

「う～、イカン、イカンぞ、取り乱してはイカン。落ち着くのだシンフォニーよ」

「プッ……クスクス」

「だ、誰だ！？」

余は辺りを見渡した。

「プッ、シンフォニて……クスクス。ゴフぅッ」　――って、お前かいっ！！！！

パッパッパッパ～

「！！！！」

瞬間、がチャリ……と音がして、玉座の扉に誰かの手が掛かるのだが、

ガンガンッ……ガッ。

「あれ、ちょっ、開かないんですけどコレ」

「た、隊長、それスライド式ですよ、横にスライド」

「はぁ？普通は押すか引くしかないだろ両開きなんだからさ～」「ちょっ、壊れますよ隊長……」

どうやら扉の向こうでは口論が始まったようだ。つーか隊長、何年も働いてんじゃないのォ！？

「隊長、勇者様けっこう傷負ってるんで早くしないとヤバそうなんですけど」

「……チッ」

え、隊長舌打ち？？

扉の向こうからは、確かに勇者の辛そうな息づかいが聞こえる。かなりの苦戦を強いられたのだろう。

「はぁ～。じゃあ頭からね、ラッパ隊“ａ”の音出して」

パァ～

「おけ」

早く、ねぇ早く入れてあげて！！！！てゆうか、どうしようコレ……

私はチラリと転がる兵士を見た。

【返事がない。ただの屍のよ……】

あ〝ーーーーーー

【スパーーーン】

ビックゥ！！！！

「あ、やべ、壊したかな」

「た、隊長～」

先ほどからすぐ横で突っ込み続ける兵士は、もはや限界と言わんばかりに泣きそうである。

「ん？」

隊長、以下兵士ＡＢＣ達は玉座を見渡した。

「隊長……」

「むぅ……」

「隊長！！？」

「分かっている！！何と言う事だ……」

「――私はＡですかＢですかッ！？」

そっち!?問題そっち!?

「うーせーな、お前なんかZだ!!」
「隊長ぉぉぉ」
「とにかくだ。お前がAかZなのかは後だ」
今にもジタンダを踏みそうな兵士を宥め、隊長は玉座を見渡した。

「チッ、あのクソったれめ、何処行きやがった」
「隊長、クソは無いでしょ、クソは」
「きっとアレだ、家出だ、うん。家出」
「いくら何でも飛躍的過ぎじゃ……」
「おっしゃ捜索すんぞZぉぉお」
「Z!?やっぱZなの!?」
隊長は乱心しつつ、くるりと勇者へ顔を向け軽やかにお辞儀をした。
「今日からは貴方様がシンフォニー王で御座います、宜しいな?」
「……え」　玉座にはプッ、クスクス等と兵士達の笑い声が飛び交う。王の名前は失笑を買う為、今までトップシークレットとして扱われていたのである。
そんな名前を掲げ、なおかつ留守番なんて酷過ぎる、勇者はそう思った。
「プッ。シ……シンフォニー様、留守番宜しくね」
隊長あんた笑い過ぎだよ!!明らか堪えてんじゃん、プッて笑ってんじゃん!!!!

勇者はげんなりした。

「……あの、僕帰っていいですか?身代わりとか影武者って事ですよね。酷くないですか?シンフォニーて何ですか、戦艦ですか……」

「行くぞZぉぉぉお」
【パァー】
「聞けよぉー！！」

勇者が不満をぶちまけ終わるが先か、隊長、以下ラッパ隊達は旅立ったのであった……

第一話◆家出だろうが何だろうが、旅立ちゃいいんだろぉ！？◆

ズルズル……ズルズル……

「重い」

とっさに城を抜け出した王は途方に暮れていた。

玉座の椅子の後ろにある非常出口から脱出したはいいのだが、引きずるには少々重すぎる荷物が余を途方に暮れさせる。

「何故余がこんな目に……」

今日は皆でご飯食べて、ダンパ（ダンスパーティ）とかして

ズルズル……

「目出たい日だと言うのに」

ついでに勇者のパーティーに居たボイン姉にオイたしたりして

モノにしたりとかして

ズルズル、ガッ！！

「あっ」

石の出っ張りを兵士の頭に当ててしまったが、ま、いいか。そう思いながらも進む。

「はぁ……」

ため息をつく王の背中を、夕日が寂しく照らしていた。

＊＊＊＊一方その頃

「王ぉぉぉう！！」

「王様ぁぁぁぁあ」

城の周りにある草むらを必死に捜すラッパ隊。

「もうやだ帰ろ」

「隊長ぉ、諦め早！！まだ五分！！」

「ＧＯＳＵＮ？」

「何語ーッ！？て言うか裾引っ張らないで、可愛くないから」

「え～」

「隊長ぉぉぉ！！」

＊＊＊一方その頃

ラッパ隊の三十メートル程先では、王が困っていた。

「あの……」

――喋ってる？ねぇ死体喋ってる？

「頭痛いんすけど」

「……」

「無視すか、痛いんすけど」

ひょっとしてあれかなー？痛いのは余の頭かー？

「はぁ。とりま、引きずるの止めて貰えません？」

＊＊＊＊

「説明宜しく」

「おけ」

んっんっ、と軽く咳払いをし、泥だらけになった足元をパンパンッと払うと、兵士が口を開く

「あの～私あれじゃないですか、兵士になる前は僧侶系ってヤツ？」

ちょっ、ド〇クエ！？

「う、うむ」
「で、王に溝カックンされて瀕死だったんで回復したんですけど、疲れて寝ちゃって。エヘッ」

先程から四十八回も石にぶつけてしまっていた為、目が覚めたらしい。

「つー事で、とうとう旅立ちっすよねーお供しますよ」
眩しそうに夕日を手で遮る兵士。
「えっ、あの、生きてるなら……戻れる」
「つぅーかッ！！！！男なら伝説の１つや２つ作ってみようと思わんのか！？」
「しかしもう勇者は誕生したし」

「だから何だ！？呆れたね、そんな気持ちで王様やってたのかよっ」
「だって……」
「ハァー何すか？」

「だってェ、伝説１個終わったじゃんよぉー！！１５時間位前にぃーーーー！！！！！」
王の目からは思わず涙が溢れる。ブワッって感じで。マジ溢れ出て引くくらい。
「余だって！！余だってぇ勇者になりたかったさぁ……魔王ズタズタにしてぇー微塵にしてぇーーボイン姉とチチ繰り合ってぇ……」
まさかの勇者志望！？ちょっ、待て、最後！！最後の文章おかしいから！！明らか不道徳！！っつーか冒頭からの謎、ボイン姉って何！？

「と、と、とにかく、だ。家出だろが何だろが、おまんが選んだ道じゃろ？なら突き進まんね」
「え……」
「さぁ、逝こうっ」
ガッと肩を抱かれ、無理やり王は進む。つーか進まされる。まるで誰かに操作されてるように。コントローラーが存在するかのように。

ちょっ、何か間違ってない？字違うし、家出ってお前のせい！！明らかお前のせいですから！！！！

「まずは街へ逝きますよー、色々準備が要りますからねー」

だから字！！！！！え……、まさか恨んでる？この人、殺されかけた事恨んでる！？

「と、その前に……絶景な崖を観光して逝きましょうね～」

にやり。

ちょっ、もう殺人計画立ってんのォ～～！！？

こうして、王と兵士はデコボコしながら次の街へ向かったのであった。

「ところで王様ぁ、取り敢えず、その仮面取りません？」

「……む？」

いつの間に用意したのか、大荷物を抱え兵士が王の仮面を見下ろす。

冒頭で引きずっていた為誰も気にしなかっただろうが、彼らの身長さは実に２０センチにも及ぶ。

「その金ピカの面じゃ目立つし、王様の素顔は誰も知らないから気付かないっ。て事でぇ、街に入るなら尚更取らなきゃ、ねっ」

「……ん」

何だか丸め込まれてる気もするが、今はこやつの言う事を聞いておくか。

王は渋々了解した。

ふふふ、素顔はいけ～ん。

＊＊またまた一方では……

「王ぉぉぉう！！！！」

ラッパ隊の捜索は続いていた。“もういいじゃん神隠しって事で”

そんな空気が流れ始めた頃

――ガサッ

草影の物音に目を光らせるラッパ隊。

「にゃぁ～お」

「い……居たぞ者どもぉ～！！！！」

隊長ぉ、それ猫ぉ！！どう考えても猫ぉーーーー！！

「隊長ぉぉぉぉ」

……っつー感じで、こちらのデコボコも旅立ちを迎えた訳で。
Zの受難はまだまだ続きそうな訳で……

第二話◆仮面とったら萌えなんて邪道だろ？◆

「隊長……」
「何だZ」
「やっぱ無理がありますって」
「何がだ」
「何がって……」
玉座にて片膝をつく二人。何時もならばZの呼び名にも突っ込むのだが、今回は少々状況が違っていた。

「に〝ゃ〜」

「まぁ〜シンヘォニーったら変な鳴き声ばかりねぇ」
王座にチョコンと座る金ピカ仮面にフラつく猫（ミックス二歳♀）に、后妃は心配そうな顔を向けた。

つーか后妃、名前微妙に呼び間違ってるし……
つーか、バレない訳ないし。と、Zは心配そうに隊長をチラ見する
「心配すんなー」
最近歯医者でヤニ取りしたから綺麗だろー、と言わんばかり隊長の歯がキラリと光る。

【隊長っ、やはり何か良い手があるのですねっ】
Zは安心したように顔を上げた。

「ふふ。あの仮面はなーレプリカだから軽いんだー。だから、か弱い猫ちゃんでも安心……」
【ドォゴォォン！！】

「あらあらぁ？兵隊さんの靴が壁に刺さってるわぁ。何処からかしらぁ？……あら？隊長さん大丈夫？頬から血が……」

「ちょォーっと真剣に探してきまぁーす！！」
Ｚが半目ガン切れ青筋で睨みつける中、青ざめた隊長がビシッと敬礼し、そのままで後ずさる。

「あらあらぁ、探し物かしらぁ……？」
后妃は、んー？って感じで首を傾げた。
「それよりも……シンフォニーちゃんが二人……どっちが本物かしらぁ？」
首をかしげる視線の先で金ピカ仮面猫と、後ろ手を拘束された仮面野郎を見比べる。
「ムフンムングーー！！ムンググェー！！！！」
（※勇者は口封じの為、猿轡をされたまま仮面をはめられた）
訳※
「気付くだろ普通ー！！どんだけぇーー！！」

「ダララララ……」

「五月蝿いのー」

どうやら兵士は小太鼓を叩く真似事で、このイベントを演出しているつもりらしいのだ。

イベントとは王が幼少期より着けているこの仮面を外す事。

「え？何故イベント扱いかって？」

「……うむ」

「だってそりゃー、ねぇ？誰も見たことが無い素顔なんて興味あるじゃん」

兵士はワクワクと言い放った。

「変な奴よ」

呆れたよう、だが少し嬉しそうに言い放つと、ガチャガチャと側面を触った。

（余に興味を持ってくれた人間は初めてじゃ）

初恋に似た感情と云うのか……、とにかく甘酸っぱい感じ、チェリーとかじゃなくｓｔｒａｗｂｅｒｒｙみたいな。

そんな嬉しさに胸高らかせ、王は今、脱皮する！！！！

【がチャリ】

重苦しい音と共に仮面がゆっくりと落ちる。

「うわっ」

ビュッ！！と暖かな強い風が一瞬吹き抜け、兵士は思わず瞼を閉じた。
そしてゆっくりと瞼を開ける。ゆっくり……ゆっくりと

「……ッ！！」
兵士は思わず目を見開いた

「……ブッハァ！！アーッヒャヒャッヒャ！！！！！」

「なっ！？何だ！？」

「アヒャ、あの……あ、目が目が……“３３”みたいな！！！！アッーハッハッハ」
兵士は笑い転げた、腹が筋肉痛なる位に。

「余の……余の感動を返せェェェェ！！！！」
その日、王は泣いた。

＊＊＊＊

「つーか……、顔洗ったら普通の顔って何さ、邪道過ぎだろ。あ・り・き・た・り。しかも本当ふつー。萌え要素とか無いわけ？普通さ、眼鏡取ったら輝くよ？仮面は着けた方が輝くかもだけどー」

兵士は、あーおもんなって感じで吐き捨てた。

ちょっ、ねぇ誰かコイツ殺して！！！！僕笑顔ですけど、涙止まらないんですけどッッ！！ｈｅａｒｔが早くも限界っぽいんですけどォォオ！！

「うーん……昨日の、の〇太目スペックは確かに神だったのに――」

「――お前死ねやぁぁ！！」

＊＊＊＊＊

――拝啓、母上どの

最初は嫌々だった王も何だか元気そうです。少し安心しました。

ニコリと微笑み、幸せな余韻に浸りつつ隊長はパタリ。と日記を閉じ……

「早く保護せぇぇぇやーーーーーー！！！！」

――ゴフゥ！！

「クッ……」

俺様に片膝つかせるなんざ、やるねぇ。つーか最近本気だよね、Zさん……

イライラだよね、ひょっとしてアレかな？女の子の日かな？突っ込みに殺意を感じるよ。つーか走り込んで足で突っ込みとか斬新だよね……

「あ、意識が……」

「た、隊長ォオ！！」

「つーかお前、それ言いたいだけだろぉがよぉぉぉ！！！！！」

はてさて

お気楽な御一行はハチャメチャなまま街へ突入。

いやはや、どうなるどうなる……？

・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4216d/

シンフォニー大活劇

2010年10月28日04時07分発行